

保育学生とメディアリテラシー

八 木 朋 子

愛知東邦大学

保育学生とメディアリテラシー

八木 朋子

目 次

1. はじめに
 - (1) メディアの多様化と保育学生
 - (2) 保育学生Aの事例
2. 研究目的
3. 研究方法
 - (1) 調査対象
 - (2) 調査方法
 - (3) コンピュータ不安とは
 - (4) 調査期間
4. 結果
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

近年、子どもの生活には、テレビやマンガだけではなく、携帯用ゲーム機、パソコン（パーソナル・コンピュータ）、携帯電話というメディアが急速に入ってきている。こうしたメディア—情報を伝える手段、あるいはそれを入れる「器」—は、子どもたちの生活に大きな影響を与えている。子どもたちはゲームで遊び、インターネットを介して友人関係を築いている。そして時に、トラブルに遭遇することもある^{[1][2]}。子どもたちのメディア利用が長時間なされるために、子どもたちの生活習慣を崩し、健康などに悪影響を与えていることも指摘されている^[1]。

現在の大人たちが子ども時代にはなかったメディアを、子どもたちは日常的に使用しているのである。「メディアと適切につき合っていくための基礎、基本的能力」、「メディアに関する基本的能力」を「メディアリテラシー」と呼ぶが、子どもたちがこのメディアリテラシーを学ぶことは緊急課題となっている。同時に、それを教える大人たちがメディアリテラシーについて研究することも緊急課題となっている^{[1][2]}。

(1) メディアの多様化と保育学生

保育学生も必須授業で、メディアリテラシーについて学ぶが、近年のメディアの多様化による保育現場の変化の一つとして、昔は保育者が手書きで作成していた「おたより」を、パソコンで

作成することが主流となっていることが挙げられる。保護者のなかには、「手書きのおたよりのほうが好感をもてる」という意見もあり、手書きで作成している園もあるが、作成時間について考えると、パソコンによる作成が主流となるのは必然のこととも考えられる。園だよりの形態や様式、作成にパソコンを使う場合、どのくらいのレベルが要求されるかは、各園によって様々だと思うが、就職先のパソコン使用レベルに達していないと、保育者本来の仕事に加えて、パソコン使用の習得という負担が加わることになる。したがって、これからの保育学生は、卒業前にパソコンを使用した園だよりの作成技術の習得が必要という声が、現場の保育者から聞かれるようになった。

そこで筆者は、パソコンによる園だよりの作成も含め、保育とメディアリテラシーについて考えてもらうように授業を行っている。授業では、Microsoft Officeを使用し、実際に使用されている園だよりと、市販の図書に掲載されている「おたより文例」を参考に、授業を重ねるうちに、園だよりの作成に必要なパソコン操作の方法がバランスよく使用されるように見本を準備した(図1)^[3]。1つの作品を、基本的に1時限90分以内で作成し、提出することとしている。

(2) 保育学生Aの事例

保育者養成課程の2年生であったAは、パソコンに対する苦手意識が強く、パソコンの前で、「どうしていいのか、わからない」、「私が使うと、パソコンを壊してしまうかもしれない」と、キーボードに手を置くことすら拒んだ。1年次必須であったパソコンを使う授業は、「なんとかついていった」が、「忘れてしまった」という。園だよりの作成の授業初回に配布した見本の操作方法は、ほとんど理解できなかった。

そこで、簡単な操作で完成できる見本も用意した。少しの文字と図形の組み合わせでできるもの(図2)^[4]などである。簡単な見本を見て、Aは、「これでいいのですか?」と、心配そうに言った。簡単な作品では成績に悪い影響がでるのではと、心配しているようであった。

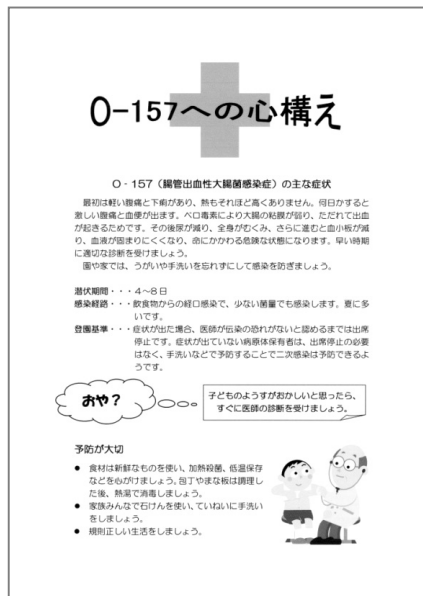


図1 おたより見本の例



図2 簡単な見本の例

パソコンの難しい操作の習得は、もちろん努力すべきであるし、それを第一の目的とした授業では、簡単な操作に甘んじてはいけない。しかし、筆者の授業は、メディアと適切につき合うことを学ぶ授業である。ここで最も重要なのは、「実際の現場で役立つものを作る」、「保護者が読みやすいものを作る」ことだと伝えた。

そして、慣れてきたところで、Aができる操作で、どんな作品ができるかを工夫させた。Aは毎回上達をみせ、最終回では他の学生のレベルに劣らない作品を提出した。

2. 研究目的

前述のAの同級生には、むしろパソコン操作を得意とする者も多い。しかし、保育者養成課程で、子どもに関する専門知識、図画工作や音楽について学ぶことを目指して進学したという意識が強く、「こんなにパソコンを使うとは、考えていなかった」と、不満をもらす学生がいることも確かである。パソコンのなかった時代には必須ではなかった役割を保育者は求められている。Aのようにパソコンへの不安が高い場合、昔はなかったストレスを抱えることになってしまうだろう。

Aの事例をきっかけに、保育学生のパソコンへの不安について、他学部の学生と比べて不安が高いのか、知りたいと考えた。また、将来を担う保育学生たちは、メディアについてどのように考えているのか理解するために、本研究を行った。

3. 研究方法

(1) 調査対象

保育者養成課程の学生196名（B大学3・4年生30名、C専門学校1～3年生29名、D短期大学部2・3年生137名）を対象とした。

(2) 調査方法

「愛教大コンピュータ不安尺度」(平田, 1990)^[5]を配布し、回答を得た。また、学生自身の「子ども時代からのメディアとのつき合い方、および現在の考え」について、自由記述を求めた。

(3) コンピュータ不安とは

コンピュータ不安とは、平田(1990)によれば「一般に、コンピュータと接触するとき、コンピュータとの接触へと導く何かをするとき、あるいはコンピュータ利用の意味について考えたりするとき個人の内に喚起される不安ないし憂慮」と定義される^[5]。

また、尺度は3つの下位概念から構成されている。コンピュータ操作時の緊張や不安を「オペレーション不安」、コンピュータの学習意欲を中心とする「近接願望」、そして、コンピュータ・テクノロジーの社会的影響を懸念する「テクノロジー不安」である^[5]。

表1 愛教大コンピュータ不安尺度（平田，1990）質問項目

コンピュータは、人間の弱点を補ってくれる便利な機械だ。
私は、コンピュータの前に座っただけで、とても緊張してしまうだろう。
私は、お金があれば、友達よりも先にコンピュータを買うだろう。
人がみている前でコンピュータの操作をすると恥をかきそうだ。
人工知能とか、コンピュータによる判断といった言葉を聞くと不愉快になる。
私は、コンピュータのキーボードを見るとまったくうんざりする。
コンピュータは、人間よりも正直で信頼できそうだ。
私は、コンピュータを利用するとき、操作を誤って何かを壊しそうな気がする。
コンピュータを操作している人を見ると、自分も早くそうなりたいと思う。
コンピュータは論理的な機械だから、手順さえふめば誰でも操作可能だろう。
これからの社会は、コンピュータによって支配されてしまいそうな気がする。
コンピュータをうまく操作できない人を見ると親しみをを感じる。
私は、新しいものよりも伝統を大切にする方だ。
コンピュータに頼りすぎると、将来、何かよくないことが起こりそうな気がする。
これからの社会では、コンピュータについて何も知らないことは恥ずべきことだ。
コンピュータと聞いただけで、もうお手上げの気持ちだ。
私は、コンピュータについて何も知らないと思われても平気だ。
科学技術の発達によって、世の中が急速に変っていくことに不安を覚える。
コンピュータの利用は、得意な人に任せておけばよい。
私は、コンピュータについて、もっと知りたいと思っている。
就職してコンピュータを操作するような職場にまわされるかも知れないと考えると不安になる。

(4) 調査期間

2010年4月～12月

4. 結果

結果（表2）は、平均得点と標準偏差で、保育学生は、総合60.2点（9.4）、「オペレーション不安」17.7点（5.6）、「近接願望」22.3点（3.7）、「テクノロジー不安」20.1点（3.7）であった。

中西・平田・伊藤・野崎・江島（1999）による1998年時の一般大学生183名を対象にした調査では、総合60.6点（9.5）、「オペレーション不安」18.3点（5.4）、「近接願望」21.6点（4.6）、「テクノロジー不安」20.7点（3.8）となっている^[5]。

表2 保育学生と一般大学生のコンピュータ不安の平均得点（標準偏差）

	総合	オペレーション不安	近接願望	テクノロジー不安
保育学生	60.2 (9.4)	17.7 (5.6)	22.3 (3.7)	20.1 (3.7)
一般大学生	60.6 (9.5)	18.3 (5.4)	21.6 (4.6)	20.7 (3.8)

5. 考察

前述のことから、保育学生のコンピュータ不安は、先行研究の一般大学生と同水準であり、保育学生は他学部の学生と比べて、不安が高いわけではないと考える。

自由記述では、「インターネットをもっと楽しみたい」、「ブログをしたい」といった、自身のメディア利用に積極的な一方で、「子どもは、善悪の判別がつく年齢までは、昔ながらの育て方が良い」など、子どもへの新しいメディア利用には慎重な意見が多くみられた。インターネットが広く一般に使われるようになったのは1995年頃からとされており、先行研究が発表された1999年は、携帯電話からもインターネットができるようになった時期である^[2]。日常生活の中でメディアが急激に多様化し、複雑に変化し始めていた時代の、一般大学生のコンピュータ不安である。本研究対象の保育学生の「テクノロジー不安」が、その頃の平均的水準であることは、慎重さが必要とされるメディアリテラシー習得のためには、悪いことではないと考える。

「オペレーション不安」も、保育学生全体では、一般大学生より高いわけではないことがわかった。前述のAは、「私が使うと、パソコンを壊してしまうかもしれない」と言っていたことから、おそらくAは、この「オペレーション不安」が、他の学生よりも特に高かったと考えられる。Aのできる操作で作品を完成させ、成功体験をさせたことが、Aの不安を軽減し、改善につながったと考えられる。

また、自由記述では、「メディアとのつき合い方」と聞くと、情報機器などとの関わりと考へがちであるが、ゲームやテレビの視聴時間などにおける「親の躰」や、ゲーム機の貸し借りなどでの「きょうだい関係」、「友人関係」を、あらためて考える時間となったようである。「当時は厳しいと思ったが、今では親に感謝している」、「兄の影響で、テレビゲームでよく遊ぶようになった」などである。また、「マンガを読み過ぎたので、視力が落ちてしまったのかもしれない。自分を反面教師として、子どもには気をつけさせたい」、「テレビ視聴時間について、健康上のことだけでなく、子どもに『ルールを守る』ということを教えるのに役立てたい」など、将来の子どもへの教育について、意見がみられた。

6. おわりに

メディアリテラシーとは、単に情報機器の便利さや、安全な使用を考えれば良いというものではない。私たちをとりまく生活環境、人間関係、子どもたちの心身の健全な発達を抜きにして語ることはできないものである。保育者養成を通して学生と共に、今後もそれらを追求したいと考える。

また、保育学生全体のコンピュータ不安は、一般大学生と比べて高いわけではないことがわかったが、前述のAのような学生のために、個人差に配慮した授業方法の改善が必要である。今後も継続的な調査研究が求められる。

引用参考文献

- [1] 藤川大祐・塩田真吾「楽しく学ぶメディアリテラシー授業」学事出版, 2008, pp3-14.
- [2] 矢野直明・サイバーリテラシー研究所「子どもと親と教師のためのサイバーリテラシー」合同出版, 2007, pp10-11.
- [3] 鈴木洋「健康・病気のCD-ROMおたより文例」ひかりのくに, 2005, p44.
- [4] たけやけいぞう「パソコンで園だより・クラスだより」チャイルド本社, 2004, p111.
- [5] 堀洋道・松井豊「心理測定尺度集Ⅲ」サイエンス社, 2001, pp178-182.

受理日 平成24年 9 月25日